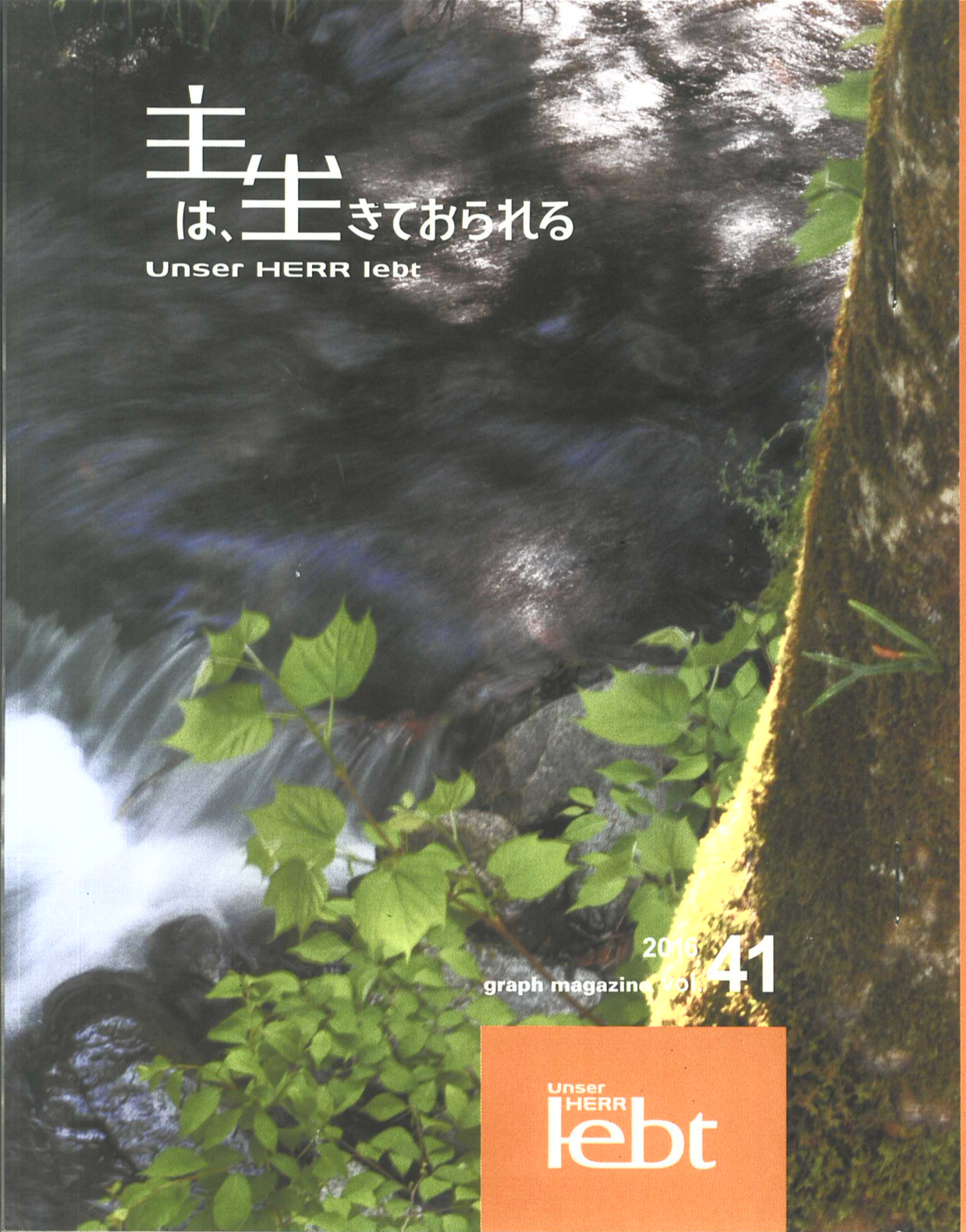


主は、生きておられる

Unser HERR lebt

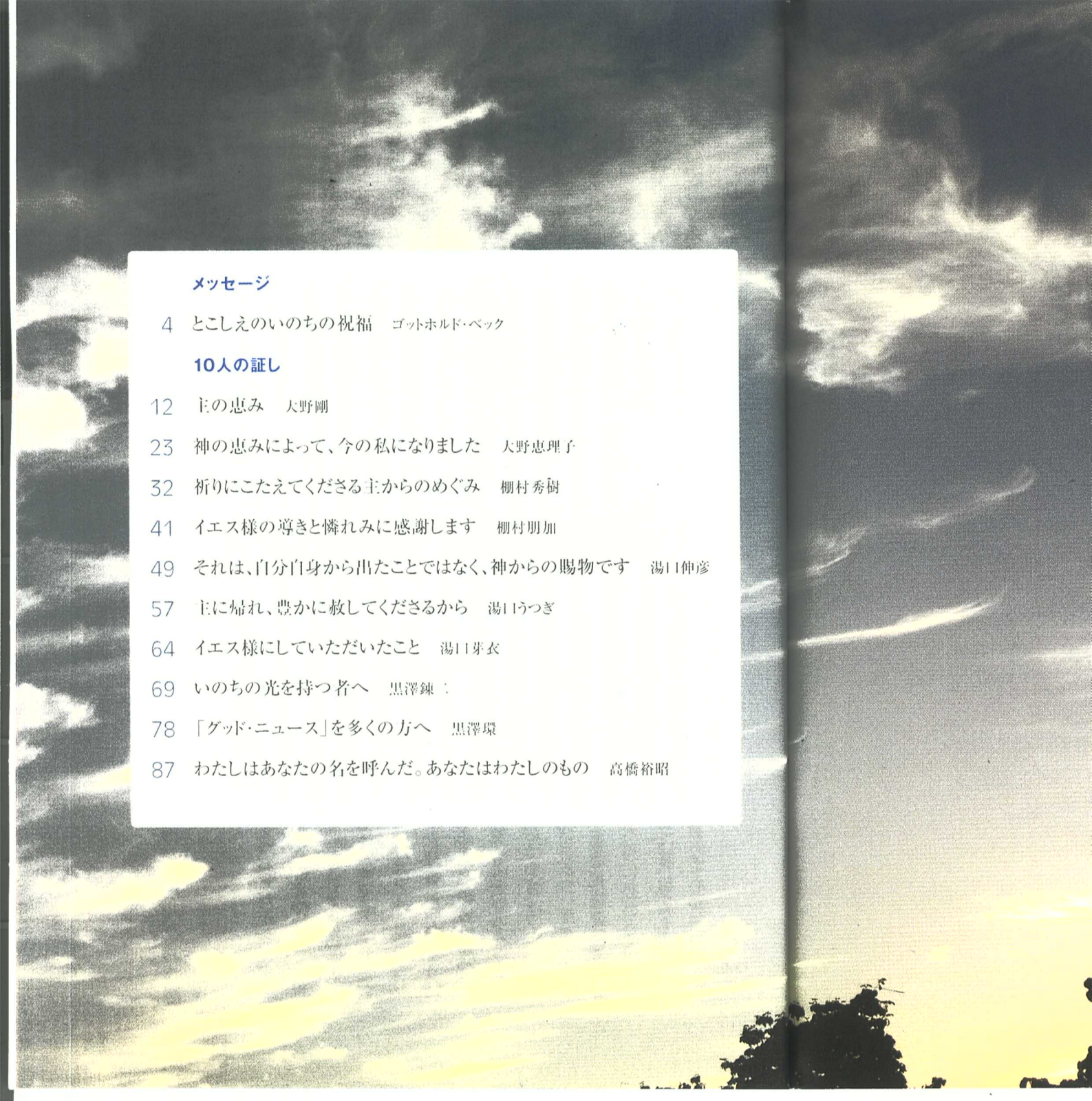
2016
graph magazine vol. 41

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 41　定価100円（税込み）



メッセージ

4 とこしえのいのちの祝福　ゴットホルド・ベック

10人の証し

12 主の恵み　大野剛

23 神の恵みによって、今の私になりました　大野恵理子

32 祈りにこたえてくださる主からのめぐみ　棚村秀樹

41 イエス様の導きと憐れみに感謝します　棚村朋加

49 それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です　湯口伸彦

57 主に帰れ、豊かに赦してくださるから　湯口うつぎ

64 イエス様にしていただいたこと　湯口芽衣

69 いのちの光を持つ者へ　黒澤錬二

78 「グッド・ニュース」を多くの方へ　黒澤環

87 わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの　高橋裕昭

とこしえのいのちの祝福

ゴットホルド・ベック

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。（詩篇　133・1～3）

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。（詩篇　115・1）

主イエス様のいない人生は無価値であり、無意味です。主イエス様だけが永遠のいのちを与え、真の満足を与え、すべての問題を解決する力をもつお方だからです。

前の二つの聖書個所を読むと「とこしえのいのちの祝福」というテーマが見えてきます。「とこしえのいのち」とは「もの」ではなく主イエス様ご自身です。「わたしは、いのちです」（ヨハネ　11・25）と主イエス・キリストは、はっきり証ししておられます。また聖書は次のように言っています。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく」（ヨハネ　3・36）、「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」（ヘブル　13・8）。

永遠のいのちであられる主イエス様の祝福を得ることこそが、最も大切です。私たちが本当に必要なただ一つのものは、とこしえのいのちの祝福です。私たちは、主である神様の祝福を受けるときに初めて心が満たされ、喜びと平安の中に生き生きとした希望をもって日々過ごすことができるのです。

人間は誰でも幸せになりたいと望んでいます。ところが残念なことに、多くの人々は、現実に幸せにはなれない、と思いこんでしまっているのです。真の幸せの根拠とはいったい何でしょうか。それは、とこしえのいのちの祝福を得ることです。今回は、このとこしえのいのちの祝福を得るための三つの道について考えてみましょう。

第一に、まことの神を知ること。次に、まことの一致をもつこと。第三に、主である神の栄光を求めることです。

1まことの神を知る

とこしえのいのちの祝福を得るためには、まことの神を知る必要があります。まことの神とは一体だれなのでしょうか。ダビデは詩篇の115篇を通してはっきりと答えています。まことの神とは「天と地を造られた方である」と15節に、そして、「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる」と3節に書いています。ひとことで言うなら、まことの神は「生きておられるお方」です。

この世のいわゆる神々は、人間の思想と想像の産物です。人間によって造られたそうした神々は、聖書の中で「偶像」と呼ばれています。ダビデは、まことの神と偽物である偶像を比較して、まことの神に出会った人々だけが、主を知り、心の拠（よ）り所をもち、「神様は私の神です」と喜んで言うことができる、と言いました。事実、ダビデもイスラエルの人々も「私たちの神」（3節）と証しすることができたのです。まことの神に出会っていない人々は神を知らないので、決して「神は私のものである」と言えません。ですからダビデは「彼らの偶像」（4節）と言ったのです。

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名に

のみ帰してください。なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。

彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。

これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。（詩篇　115・1〜8）

ダビデ王は、「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。」（3節）と言いました。まことの神は、天に住まわれ、神にとって不可能なことは何一つありません。

多くの偶像は、あるときは男に似せて、あるときは女にかたどって作られています。芸術的に作られているものもたくさんあります。しかし、偶像はすべて、語らず、また答えることをしません。これに対して生きておられるまことの神は、真心から求める者に必ず答えてくださいます。その意味で、偶像は口も目も耳も使えないのです。他の聖書個所でも偶像のことが語られています。

主はあなたがたを国々の民の中に散らされる。しかし、ごくわずかな者たちが、主の追いやる国々の中に残される。あなたがたはそこで、人間の手で造った、見ることも、聞くこともせず、食べることも、かぐこともしない木や石の神々に仕える。（申命記　4・27〜28）

生きておられるまことの神は、決して黙してはおられません。聖書に記されたみことばを通して、私たちに語りかけてくださいます。また、まことの神様は、盲目ではありません。隠れているものでも、小さいものでも、すべてを見通すことがおできになります。生きるまことのこしえのいのちの祝福を得るために、人はまことの神を知る必要があります。まことの神を知るためには、自分自身を低くして、正直にならなければなりません。「私は、まことの神から離れている者です。過ちを犯した者です。満たされていない者です。心の拠り所をもたない者です。どうか、憐れんでください」と主イエス様に向かって叫ぶことです。主イエス様はご自分のところに来る人に対し「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」（ヨハネ　6・37）と約束なさいましたから、もし、あなたが正直になって祈るなら、ただちに、赦され受け入れられたことを確信し「主よ、赦してくださったことを感謝いたします」と祈ることができます。

2まことの一致をもつ

とこしえのいのちの祝福を得る道とは何でしょうか。答えは三つです。一つ目はまことの神を知ること、二つ目はまことの一致をもつことです。聖書は次のように述べています。

神は、耳が聞こえないお方ではありません。必死に救いを求める人、また心の貧しい人の叫びを必ず聞いてくださいます。

しかし、主はまことの神、生ける神、とこしえの王。（エレミヤ　10・10）

生きておられる神様に信頼する人は、必ず助けを経験します。主は私たちを助ける力、また守る力をもっておられます。ダビデは喜びと確信をもって、「私たちの神は人間に語りかけ、すべてを見通され、聞いておられる方だ。私たちの神は生きておられ、私たちの助けであり、盾。私たちを助け守ってくださる全能のお方です」と言うことができました。

まことの神は、私たちのわがまま、過ち、罪を赦してくださり、私たちのようなつまらない者を受け容れてくださり、永遠のいのちを与えてくださるお方です。と

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

（詩篇　133・1～3）

まことの一致のあるところに、主がとこしえのいのちの祝福を命じられたとあります。まことの一致とはどのようなものでしょうか。それは、同じ愛の心をもつことであり、心を合わせることであり、志を一つにすることです。パウロがピリピの兄弟姉妹たちに宛てた手紙には「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」（ピリピ　2・2）とあります。パウロはこの手紙を牢獄の中で書きました。彼はもちろん囚（とら）われの身で悩んだり、苦しんだり、心配もしたでしょうが、はっきり言えることは、自分のことを忘れ、兄弟姉妹たちの成長のために祈り続けたということです。自分が牢獄から出られるよう祈ってほしいと頼むのではなく、「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と書き送ったのです。「同じ愛の心を持ちなさい」というのは、主イエス・キリストを通して明らかになった神様の愛を体験的に知ること、それから、主の愛を伝える器となることを意味しています。

パウロはエペソの兄弟姉妹にも「愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」（エペソ　4・2～3）と書き送っています。私たちキリスト者は、お互いを通して相手に祝福をもたらすように召されているのです。私たち一人ひとりを通して、他の兄弟姉妹が主イエス様とさらに深い交わりをもつようになり、主に一層近づき、妥協せずに、喜びに満たされて信仰生活を送ることができるようにと、主は信じる人々を用いようと望んでおられます。

次に「志を一つにする」とは何を意味しているのでしょうか。それは、主イエス様が見られたように人を見ること、主イエス様のようにこの目に見える世界を見ること、そして主イエス様がもっておられるのと同じ願いもつということです。パウロは当時の信者たちの中に二種類の人々がいたことを書いています。一つは次の個所に出てくるような人々です。

テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもいないからです。だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。

（ピリピ　2・20～21）

ここに書かれた人々は、疑いもなく主イエス様を救い主として受け入れ心から信じていますが、イエス様のことよりも自分自身のことを求めています。ぜひ覚えていただきたいことは、自分自身を無にして主の栄光を追い求めるということによってのみ、兄弟姉妹が志を一つにすることができるということです。

主イエス様はペテロに「あなたはヨハネのようになりなさい」とはおっしゃいませんでしたし、また、ヨハネに向かって「あなたはペテロのようになりなさい」ともおっしゃいませんでした。同様に主はマリアに向かって「マルタのようになりなさい」とはおっしゃらず、マルタに向かって「マリアのようになりなさい」ともおっしゃいませんでした。合唱するときにはいろいろなパートで歌います。主である神様は賛美が一本調子ではなく、互いに調和を保ちながら美しいハーモニーを奏でることを望んでおられます。信仰の弱い人も強い人も、また能力のある人もない人も、主への賛美のために一つ心になるべきです。

主イエス様は、正しい認識に欠ける信者たちにも、ま

とこしえのいのちの祝福

た疑惑の中にいる信者たちにも思いやりを示してくださり、彼らを愛し、ご自分のいのちをこのような人々のために捧げてくださいました。この心の態度を私たちももつべきです。

3 主のご栄光を求める

とこしえのいのちの祝福を得る道は、第一にまことの神を知ること、第二にまことの一致をもつこと、そして最後に「主の栄光を求めること」です。この最後の点について考えたいと思います。

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。・・・私たちは、今よりとこしえまで、主をほめたたえよう。ハレルヤ。（詩篇　115・1、18）

生まれつきの人間は主の栄光を求めようとはしません。自分のことしか考えていないからです。ですから、主である神の栄光を求めるようになることとは、主の御霊の働きの結果であると言えます。御霊の働きについて、主イエス様は次のように言われました。「御霊はわたしの栄光を現わします。」（ヨハネ　16・14）。御霊が主イエス様の栄光を明らかにされると、人間はひれ伏して主を礼拝せざるを得なくなります。ダビデの言ったように「私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。」（詩篇　115・1）と言うようになります。

ただ主なる神にだけ栄光が帰されますように。これはダビデの願いであり、また切なる祈りでした。私たち人間の陥りやすい危険は、いつも自分自身が中心になりたいと思う気持ちです。ただ、自分の名誉だけを求める人は主の栄光を奪い取ってしまう者であり、その結果、必ず自らに不幸を招く者となります。その反対に、主の栄光

だけを求め続けると、人生は本当に満たされたものとなるのです。主の栄光を求めながら祈る人は必ず主からの応答を得ます。主からの応答は、崩されることのない喜びであり、また絶えることのない平安です。

主の栄光を熱心に求めることが、私たちの信仰生活の特徴となるよう、祈り願ってやみません。バプテスマのヨハネは「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」（ヨハネ　3・30）と告白しました。だからこそ、彼は大いに祝福され、喜びに満たされたのです。自分自身が大切なのではなく、また自分の身の上に何が起こるかということも重要ではなく、大切なのは、ただ主の栄光が現われることを求めることです。満たされた人生の秘訣は、主である神様の栄光だけが崇（あが）められますように、という切なる願いに他なりません。

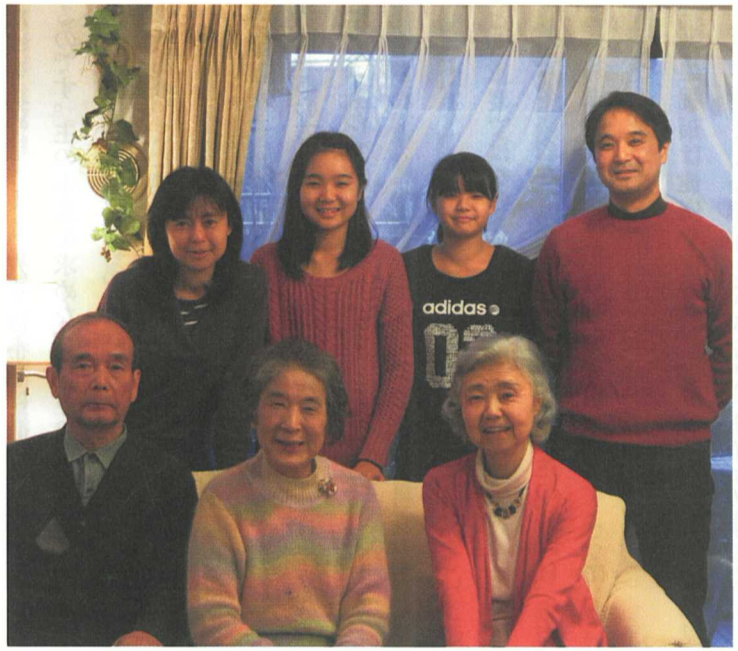
主の祝福は健康や富や美しさといったような目に見えるさまざまな事がらではなく、主イエス様ご自身です。一言で表現するならば、私たちは主イエス様の内にすべてをもっているのです。主イエス様の内には汲（く）み尽くすことのできない富が、私たちのために備えられています。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。　（ローマ　8・32）

私たちが必要とするただ一つのものは、主の祝福です。主の祝福をいただくときすべてのものを持ちます。しかし、主の祝福が私たちの上にとどまることができないとき、私たちはまことに哀れな者なのです。すべての点において主は私たちを祝福したいと願っておられます。毎時間、毎分、毎秒、一瞬一瞬、常に主は私たちを祝福したいと願っておられます。しかも現在から将来に至るまで、主は私たちを祝福したいと望んでおられるのです。

主の恵み

大野　剛



後の左から、妻の恵理子さん、初穂さん、真理さん、剛さん、ご両親ご家族と一緒に

妻との出会い

私が、妻である恵理子姉と出会ったのは大学でのテニスサークルでした。お付き合いが始まり、恵理子姉のお母様である祥子姉がイエス様を信じる信仰を持っていることを聞きました。恵理子姉のお父様は、恵理子姉が中学生のときにガンで急に召されたのですが、それでもお母様であります祥子姉は、天の御国で再会できる希望をもって元気にしておられることを聞き、そんな辛いことがあっても元気でいられるのはなぜだろうと思ったことを覚えております。

この頃は、週末のデートが楽しみで、それが日曜日になることもありました。当時の私は、礼拝だけでなく、それ以外のすべての面でも恵理子姉の信仰の歩みを阻害していたのです。

入院

その後、私にとって大きな転機が来ました。一九九四年に卒業し、社会人となりましたが、社会人二年目に腰が悪く入院そして手術となり、五か月ほど休職しました。椎間板ヘルニアで、歩くのも座るのも立つのも、寝ていても、痛くて思うように動けなくなりました。学生時代から腰痛はあったのですが、まさかそんなにひどくなるとは思いませんでした。

入院中に、お母様の祥子姉から一つのカセットテープを恵理子姉経由でいただきました。内容は、バイクの事故で足の骨折をした男性が、手術を繰り返す苦しみを通して福音に触れ、イエス様を信じるようになった、ということでした。私もちょうど手術をしたときで、痛く苦しい中でもあり、そのテープを何回も何回も聞いたのを覚えています。そして、この証しのテープを聞くと、よくわかりませんがとにかくほっとする気持ちがしたのです。またそれだけでなく、私の思いとは逆に、そのテープが私のことを決して受け入れてくれていないと感じていた祥子姉からいただいたプレゼントであることが、正直とても嬉しかったのです。

> 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。
>
> （2コリント　4・17）

この試練は、イエス様がすでに私を救いへと導いてくださるために必要なことだったのだと思います。またこのことによって、大好きだったテニスから離れることになりました。

結婚を通じての主の導き

その後無事退院でき、大きな後遺症もなく、徐々に普通の生活に戻ることができました。そして恵理子姉とのお付き合いも続いていき、結婚を意識するようになりました。そんなあるとき恵理子姉から、

同じ信仰を持っていない人とは結婚できないと言われました。このころの恵理子姉は学生時代と比べて「何か」を意識するようになっていたようでした。私は、恵理子姉の言葉に対して不思議と動揺はなく、冷静に受け止められたと思います。やはり結婚は好きという感情だけではなく一生のことだと思いました。それだけに信仰に関しては安易に同調するのはやめようと思いました。信仰は個人的なものであり、ましてや結婚するために信仰を持ったふりをするのはいけないと思いました。

その一方で、イエス様を信じる信仰とはどういうものなのかを知りたいと強く思いました。そんな中、それまで何回かお会いしていた集会の兄姉の御代田の別荘に招待されました。

御代田の別荘の中に入り、ダイニングテーブルの前に立ったとき、その兄弟のお母さんである姉妹から「よかったわね、五年前から祈ってたのよ」と言われました。そのとき、その言葉が決して社交辞令ではなく、ほんとうに純粋なことばに聞こえました。それまでの私は、この世は本音を隠して建て前でつき合っていく世界だと思っていました。でも、こんなに素直な気持ちで、他人である私のことを祈っていた、と言える世界があるんだと知り、とてもあたたかい気持ちになったのを覚えています。

それでも御代田の福音センターに行くときは、決して騙(だま)されないという頑(かたくな)な気持ちでいました。私はそれまで聖書に触れたことなどなく、かなり身構えていました。礼拝堂の後ろでメッセージの間も毎回寝てしまいました。しかし、その兄弟は、なんの文句も言わずに付き添っていてくださり、たまに疑問に感じたことを聞いても、いやな顔もせずに丁寧(ていねい)に説明してくれました。

そうしているうちに、自然に違和感や偏見はなくなっていき、逆にみなさんみたいに喜びを持てたらいいなと思うようになっていきました。あるとき、別の兄弟は、イエス様を信じるというのは「信じることができた」というよりは「信じられたらいいな」と思うことかな、というようなことをおっしゃいました。なんだか気が楽になった気がしました。あるとき、御代田のセンターの二階でベック兄のお話を聞きました。ベック兄は、聖書を勉強していなくても、イエス様に「ごめんなさい」「ありがとう」「よろしくお願いします」をするだけでいいんだ、とおっしゃいました。ベック兄のあとに続いて、初めて声に出してお祈りをしました。そのときはドキドキしましたが、とても晴れやかな気分になり、いつの間にか背負っていた何かがすべて無くなり、体が軽くなった感じがしました。その夜、その兄弟の別荘にもどったら、そこにいた多くの兄姉におめでとうといわれました。これも何がおめでとうなのかわかりませんでしたが、何だか嬉しい気持ちになったのを覚えています。

わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。
（2コリント　6・2）

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。
（エペソ　5・8）

一度も私がお会いしたこともない、主を信じる集会の兄姉が、私のためにお祈りしてくださっていたこと、そしてさらに私が生まれる前から私のことを愛してくださっていた神様のことを覚えるときに、ほんとうに感謝の気持ちでいっぱいになります。

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。
（イザヤ　46・3〜4）

一九九九年四月十日に御代田の福音センターで恵理子姉との結婚へと導かれました。このとき不思議と私の両親は反対することなく、主を中心とした結婚式をゆるしてくれました。その後、私の母親にも「主を信じ、希望がほしい」という気持ちが与えられ、今は共に祈り合う姉妹であるのも感謝です。

聖書を知る喜び

結婚後すぐに子どもが与えられました。二年ほどしてから、子どもに連れられるように一緒に日曜学校に参加するようになりました。当時の私にとって、日曜学校で子どもたちに語られるお話の一つひとつがとても新鮮であり、わかりやすく、毎週の楽しみとなっていきました。このことにより、聖書は「単なる信仰の手引書」ではなく「主からの生きた言葉」であると思えるようになりました。

聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

（2テモテ　3・15〜17）

イエス様は、もっとみことばを知るようにと、子どもたちにお話をするご奉仕を与えてくださいました。そのときは、子どもたちと一緒に聖書を学べるのはうれしい反面、聖書を良く知らないのにいいのかな、といった複雑な気持ちだったのを覚えています。そんな状況でしたので、すべてがイエス様に祈りながらでしたし、今でもそれは変わりません。さらに日曜学校のご奉仕を通じて多くの兄姉との交わりにも加えていただき、多くの恵みをいただいて感謝しております。

そして今でも新しい発見の連続であり、聖書を知る喜びをいただいております。

このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。

（コロサイ　2・3）

あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。

（コロサイ　2・6）

妻との祈り

日曜学校のご奉仕もあり、徐々にいわゆる集会生活に慣れていったと思います。ただ、家での夫婦生活では、祈り合う関係とは言えませんでした。それどころか相手を気遣うというより、お互いわがままな自分の思いをぶつけあっていたことが多々ありました。

謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

（エペソ　4・2〜3）

これは結婚にあたって指輪に刻んだみことばなのですが、真逆の生活だったと言わざるをえませんでした。妻の母である祥子姉からも「二人でこのみことばをよく読みなさい」と叱られたこともあり、かなりショックを受けました。また何年か経って、恵理子姉より「せっかく一番近いところにいる主にある兄弟なのに一緒に祈れないのは寂しい」と言って泣かれました。このときやっと目が覚めた思いがしました。集会では兄姉と一緒にお祈りもするのに家ではまったく祈っていませんでした。そして、毎朝一緒に聖書の一節を読み祈る生活となりました。

あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心

を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。（マタイ　18・19）

その後は、つまらないことでお互いが険悪な感じになっても、どちらからともなく「ごめんなさい」と言えるようになったと思います。相手には素直に謝れないときにも、イエス様の前では正直になるしかないですから。

仕事を通じての試練

二〇一三年、こころからイエス様に助けを求め、みことばによって支えられ「イエス様は目には見えないけれど今も生きておられる」、また「どうしようもない自我という罪をイエス様が十字架ですべて帳消しにしていただいた」という思いが与えられた初めての体験をいただきました。

その当時、私は、仕事に関して「自分はうまくやっている」と思っていました。仕事内容も入社してから一貫して同じ分野した。そんなときに昇進することになりました。

しかしそこから環境は一変しました。上司からは要求される内容が一気に増えました。そこで私は、一生懸命その課題を乗り越えるべく努力をしました。こなしきれないで残った仕事は週末持ち帰り、努力をしました。ただ、一向に思ったように進められません。そして進められないことをだんだん叱責されるようになりました。最初のうちは歯を食いしばって耐えていたのですが、長時間一方的に迫（せま）られることが続くようになると、怖いという感情になり、そのうち今までできていたことさえ、できなくなってしまいました。私にとっては、仕事を通じて体験する初めての挫折でした。

それまで毎週集会にも集い、信仰的な生活を送ってきたと思っていました。でも最後まで自分の力に頼

り、自分の手で握って放さないものがあったのです。それが仕事でした。イエス様は、この、自分の手で握って放さないもの、に光を当てられたのだと思います。

実は、それまで私は、仕事において本当に高慢であり、まわりの方に対してもほんとうに愛のない態度でいたのです。自分は正しいといつも思っており、言葉で言わなくてもそのような態度を取っており、信仰をいただいたにもかかわらず、ほんとうに陰険で、自己中心で、わがままな性格は何一つ変わっていなかったのです。

その後だんだん夜も眠れなくなり、一度起きると明け方まで恐怖感で休まらない日が続きました。私にとってこのような体験は初めてであり、ほんとうに辛かったのです。しかもその状況は一年続きました。半年たった夏ごろには体重も減り「最近痩（や）せたね」とまわりから言われることもありました。こうして「うつ」になるのかなと感じていました。でもどうしようもないのです。ただ会社には行っていました。なぜなら一回休むとそのまま会社に行けなくなるのが怖かったからです。

その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。（詩篇　37・24）

私にとっての日々の支えは、「毎朝の妻とのお祈り」と「日曜礼拝後の兄弟との主にある交わり」でした。

眠れない日などは、早く朝がきて恵理子姉とお祈りがしたいと思うことが多くありました。聖書を開きみことばを読み、こころ静かに主に祈るときだけが、すべてのことから解放されたように平安になるのです。また毎週の日曜の礼拝後のお昼の交わりでは、主にある兄弟たちがそれぞれ、私の悩みを聞いてくださり、熱心に主にあって励ましてくださり、みこと

ばをいただいたり、お祈りもしていただきました。本当に、本当に感謝でした。この主にある交わりがどんなに励ましになったかわかりません。ある兄弟は同様な試練を以前体験していて、その際によく励まされた詩（集会の祈りのショートメッセージ集）を教えていただき、会社に行く電車の中では新聞ではなく、まずその詩を毎日必ず、飲み込むように繰り返し読むようになりました。ほんの一部ですがご紹介します。

「信頼するとは、何も見えなくても、主は近くにおられる事実を確信することです。」

「あなたが、新しい一日を主への恐れをもって始めるなら、人を恐れる気持ちがなくなるでしょう。」

「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない。」

ある兄弟からは「恐れている上司のこともお祈りするといいよ」と言われました。私は戸惑いましたが、その後毎朝祈るようになりました。

自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。
（マタイ　5・44）

そのうち、あれほどびくびくしていた上司との会話でも、これはイエス様が私に必要なこととして示されていることなんだ、と冷静でいられるようになりました。

なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。
（マタイ　7・3）

ベック兄があるメッセージでおっしゃっていた、「心配しなくていい」「思い煩らわなくていい」「恐れなくていい」の「三つの薬」をリビングに貼り、いつでも目に入

るようにしました。今でも貼ってあります。

また、パウロの証しが、心に染みました。

そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（2コリント　12・7〜10）

この「弱さを誇りましょう」と高らかに証ししたパウロの信仰はすごいと思いました。

他にも多くのみことばが与えられました。それまであまり目を留めなかったみことばばかりでした。そして忘れないように、示されたみことばを書き記し、何度も見返しました。ほんとうに励まされました。

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。
（ヤコブ　1・12）

このみことばからは、「いのちの冠」ってどういうものかな、自分もこの「いのちの冠」を受けたいと思いました。

そして、一年続いた嵐は突然やみました。そのとき、負担となっていた役割を他の方々が分担されるようになり、懸案からも解放されました。忙しさは相変わらずでしたが、叱責されることがなくなり、重荷が減ったというか、消えたというか。今になってみれば、この試練も本当に主の恵みなのでしょう。

10 人の証し

Unser HERR lebt

もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

（2コリント　1・9）

私自身には内在する恐ろしいばかりの罪があります。傲慢（ごうまん）であり、自分を守ろうとするものであり、卑劣です。残念ながらその性質は変わりません。でもそんな私の罪のためにイエス様は身代わりとなって十字架にかかってくださり、赦してくださったのです。またそれだけでなく三日後によみがえり、今も生きていてくださり、聖霊をくださり、主を喜ぶことを教えてくださいました。さらには、永遠のいのちにより、死が終わりでなく、天の御国で主とともに生きる希望を持って歩めることは、本当に主の恵みです。

いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

（黙示録　22・17）

大野　剛（おおの　たけし）
一九七〇年十一月二日東京生まれ、
町田市立南第一小、桐蔭学園中・高卒、
成蹊大学法学部卒、
キヤノンマーケティングジャパン株式会社勤務、
東京都練馬区関町在住、
妻：恵理子（えりこ）、長女：初穂（はつほ）、
次女：真理（まり）

神の恵みによって、今の私になりました

大野　恵理子



夫の剛さんと

父の死

私は一人っ子で特に大きな問題もなく、ごく普通の家庭で育ち、小学校三年から高校までカソリック系のミッションスクールに通っていました。そこで見聞きすることには特に心に響くものはなく、神様はとても遠い存在で、自分の日々の生活には何の関わりもなく、淡々と学校生活を送っていました。小学校高学年の頃、学校から近所の教会に集うように言われ、同級生が見つけて一緒に行き始めた日曜学校が吉祥寺キリスト集会でした。集ったのは短い期間でしたが、その後、母がこのキリスト集会に集うようになったことも、不思議な導きでした。

父は、私が小学校三年から中学一年までの四年半ほど北海道で単身赴任をしていました。そして東京に戻り、再び家族三人の生活をするようになって程なく、大腸ガンあることがわかりました。わかったときはすでに状態が悪く、四ヶ月で召されました。私

が中学二年、十四歳の時でした。このことは私にとって辛く、奈落の底に突き落とされたような大きな衝撃でした。そんな私とは対象的に、母は父の発病前にイエス様を救い主として受け入れ、永遠の命、天国での父との再会のお約束を信じていました。それまでの母は父に何もかも頼りきりでしたので、母がこのような状況の中で強く凛としていたことに驚きました。ベック兄も家や病院に父を見舞ってくださり、父も素直に、最後はイエス様を受け入れ召されました。召された顔はとても平安でした。そんな中で、聖書のみことばが初めて心に響いたのは、葬儀の祭壇に飾られていた次のみことばからでした。

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。
（ヨハネ　11・25）

涙で潤（うる）んでいた景色の中に、突然このみことばがひとすじの光のように目に飛び込んできました。父は天国で生きている。それまでまとわりついていた悲しみと絶望のなまりのような重荷がすっと軽くなったことを覚えています。父と再び天国で会うことができ、父は死んでも生きていて、いま素晴らしい所にいると思うと心が軽くなり、希望を持つことができました。

神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。
（黙示録　21・3～4）

私たちの国籍は天にあります。
（ピリピ　3・20）

父は現在、天国に単身赴任中です。父と過ごした時間は短い期間でしたが、再び御国で再会し、永遠に主と共にいられるお約束を確信し、会える時を楽しみにしております。

放蕩娘から再び主と出会うまで

それから母に連れられ集会に集うようになり、ベック兄から十字架や罪、三位一体のお話などを伺（うかが）いました。イエス様は私のために十字架で死なれた、ということはあまりよくわかりませんでしたが、天国の希望と、母と二人の生活が考えられないほど守られていることに神様の憐れみを感じ、大学一年の時受洗しました。たくさんの方から祝福され嬉しかったことを覚えています。

しかし、高校までの厳しく勉強ばかりの女子校での生活から、自由な大学生活へと変わって、自分の思うままに生きたい、信仰を窮屈だ、と感じるようになりました。次第に心はイエス様や集会から離れていきました。母の顔色を気にしながら集会に行きつつも、主人である剛兄とのお付き合いも始まり、心ここにあらず、でした。そのような二足のわらじ状態が辛くなり、社会人になると集会へはもう行かない、と宣言しました。当然母との関係はギスギスし、親子関係は最悪なものとなっていきました。同じ屋根の下で、母は私の身の周りのことは一切やめ、別居状態となり、それが五年ほど続きました。母にとって、イエス様から遠く離れてしまった私は大きな悩みの種となり、父の病気のこと以上に辛かったそうです。そのような私を主はどれほどの忍耐を持って憐れんでくださっていたか、母がどれほどの想いで私の救いを祈り続けてくれていたか、その時はもちろん知る由（よし）もありませんでした。しかし主人との結婚を考えるようになった頃、このまま主からも親からも祝福されない結婚をすることが恐ろしくなり、同じ土台のない結婚生活への

不安、主の祝福がない人生の空しさを覚えました。暗闇から光へ、イエス様がずっと叩き続けてくださっていた心の扉をやっと開いた時でした。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。（黙示録　3・20）

気がつくと、「罪にまみれた酷い私ですがあなたの元に返りたいです。許されるならあなたの祝福のある結婚に導いてください」と、イエス様に祈り求めるようになっていました。次のみことばを聖書に見つけた時は本当に嬉しく、イエス様はこんな私を咎めず赦してくださり、ずっと待っていてくださったのだと知りました。

主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。（イザヤ　55・7）

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。（イザヤ　43・25）

私は聖書の中に出てくる、父（神）のもとを離れ自分勝手に生きることを選び、結果ボロボロになって父のもとに返ってきた放蕩息子そのものでした。どんな顔で集会に戻ったらいいかわからないまま、押されるように主のもとに戻していただきました。それからは主と再び出会った喜びいっぱいで、すべてが新しく見えました。まるで初めてコンタクトレンズを入れたかのように世界が美しく見えました。眠くて仕方なかったメッセージが聞きたくなり、聞き慣れた聖書のみことばが、まったく新しいものとなって心に染み込みました。

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。（1ペテロ　2・25）

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。（詩篇　119・130）

結婚したいという思いは二の次になり、私は彼からは離れられても、もうイエス様からは離れたくないと思いました。そして同じ土台でないと結婚できないと告げた主人を主は憐れんでくださり、主人もイエス様を信じる者と変えてくださり、一九九九年四月にベック兄の司式のもと御代田の国際福音センターで結婚式をしていただく恵みに預かりました。主人に渡していた集会のメッセージテープを通して、主人の母も主を求めるようになり、現在町田集会に集っております。

結婚生活を通して

結婚はゴールインではなく、成長するための訓練の場でした。共に一人っ子で、わがまま同士の私たちにとって、間にイエス様がおられなければとてもここまでやってこられなかったと思います。また主にある集会の兄弟姉妹との交わりの大切さも痛感する日々でした。結婚後すぐに長女が与えられ、更に次女が生まれ子育てに追われていましたが、一段落ついて帰宅時間に余裕ができた頃、メッセージを聞くだけでなく、イエス様や聖書についてもっと兄弟姉妹と話したいという思いに主は応えてくださり、兄弟姉妹との主にある豊かな交わりが与えられるようになりました。家庭集会でもたくさんの恵みをいただいています。

そしてこの十五年の結婚生活や子育てを通して私が知ったのは、明らかな罪だけでなく、自分も知らなかった本当の醜い自分の姿、罪です。それは自分ではどうすることもできない自我の性質です。結婚前は、

自分は呑気(のんき)でおっとりした性格だと思っていたのですが、実は自己中心で短気、すぐイライラし、他人をさばき、自分の思う通りに家族を支配し、夫をさばく者でした。

なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。

(マタイ　7・3)

結婚の時はイエス様と再び出会った喜びしかなかった私ですが、イエス様が十字架に架けられたのはこの私の罪のためだったことを、自分のこととして受け取ることができたのは結婚生活を通してでした。

イエス様はこのような醜い私の罪のためにも十字架について罪を贖って赦してくださっただけでなく、三日後によみがえり今も生きて、そのままの酷い私を変わらぬ愛をもって愛してくださっている。イエス様の十字架の意味と深い主の愛を知った時、涙が止まらず喜びと畏敬の念でいっぱいになりました。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。　(1ペテロ　2・24)

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。　(イザヤ　43・4)

主人は、子どもたちと共に集っていた日曜学校でご奉仕が与えられ、そのご奉仕や兄弟姉妹との交わりを通してイエス様のことや聖書を知る恵みの中に置いていただくようになりました。そのような中、主人に仕事を通じて試練が与えられました。見たことのない主人の様子に、このまま「うつ」になってしまうのではないかと思いました。私もその頃、原因不明の体調不良があり、主人に頼りたい気持ちでしたが、主人に頼るどころではありませんでした。しかしこのことはすべてイエス様から来ていると思うと、なぜか平安でした。夫婦共に頼るべき方はイエス様だけでした。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」

(イザヤ　43・1〜2)

私たちを造られ、私たちの心も体も隅々までご存じの全知全能なる方に頼ることができる安心があり、私にとってもこのみことばに特に支えられ慰められた時でした。そして主の訓練期間が終わると不思議と嵐は去り、主人の試練は主をより良く知るための恵みへと変えられました。

今も日々いろいろなことがありますが、自分の努力ではよい妻・よい母にはなれないことがよくわかりました。特に子育てにおいてはたくさんの訓練と祈りと戦いがあります。子どもが大きくなってくると問題も深刻になり、親としてどうしたらいいのか、どの道がいいのかわからないことがたくさんあります。しかしすべてのことは主の許しがなくては起こらないこと、必ず主の最善に導いてくださること、すべてのことを働かせて益としてくださることを思うと、不安や思い煩いから解放され、主に委ね安心することができます。また主は誰よりも一人ひとりを心配し愛してくださっており、私たちを決して離さないと約束してくださっています。このことを思う時、平安と喜びに満たされます。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル　13・5）

集会のある兄弟と話す機会があり、私の口を通して、家族や周りの人々に主の御霊・いのちが働いてくださいと祈ることの大切さを知りました。自分の思いを訴えたり、助けてくださいとありのまま叫ぶ時もありますが、このように具体的に祈ってみると、目の前で問題が起こったり、自分の思いと違っても気持ちが楽になりました。最悪な状況下でも主は働くことができるお方であり、目には見えなくても、主のいのちが家族や周りに流れていることを覚える時、問題から離れ、主の全能の力に頼ることができます。私ではなく内側に住んでくださる御霊が、私たちの思いを遥かに超えてみじめで何もできない私を通し、生きて働いてくださることを知りました。そして私の肉の性質は変わらないけれど、すでに十字架に主とともにつけられ死んでいるのだから、古い自分に留まっていなくていいということも知りました。過去の罪もこれから犯す罪もすべてイエスさまが十字架に架かられ解決してくださったからです。また家庭は子どもや主人にとって安らぎの場でないといけないと改めて示され、子どもたちに自分の律法を押しつけ感情的に支配してきてしまったことを悔い改めました。できるなら時を戻してやり直したいと思いましたが、後悔は必要なくいつでも今日から前を向いていけばいいと知り嬉しくなりました。相変わらず失敗だらけの毎日ですが、日々主の新しいいのちをいただいて歩めることを心から感謝しています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

（ガラテヤ　2・20）

かつては、最悪のことばかり考えて心配するマイナス思考の私でしたが、主を見上げることを知って前向きな者に変えてくださいました。時折、古い心配性の自分が顔を出し思い煩いますが、自分を見ないでイエス様を見ると不安が喜びに変わります。信仰は束縛だと思っていましたが、イエス様は私たちから何も要求せず、罪から解放してくださる喜びの源であることを知りました。この喜びを一人でも多くの方に知っていただきたいと願い、この主をいつも見上げていられるように祈りながら、主の来てくださる日を待ち望んでいます。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。

（詩篇　138・8）

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

（ローマ　10・11）

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

（ヘブル　12・2）

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

（黙示録　22・20）

大野恵理子（おおの　えりこ）
一九七一年東京生まれ、
晃華学園小・中・高卒、成蹊大学卒
夫：剛（たけし）、長女：初穂（はつほ）、
次女：真理（まり）

10人の証し

Unser HERR lebt

祈りにこたえてくださる主からのめぐみ

棚村　秀樹



後列右から2番目が秀樹さん、お父様の信了さん、お姉様のご家族と一緒に

救われるまで

私は一九七一年に横浜・戸塚に生まれました。家族は、両親と三歳年上の姉、私の四人です。海外勤務が多い父親でしたので、幼少のころはケニア、中高生の時はインドネシアで過ごしました。父は温厚な人でしたが仕事で不在がちで、母は私たちを厳しくしつけました。

高校受験の時に帰国し、高校に入学しました。その時はさらに上を目指すという気持ちでした。成績優秀で生徒会や部活動に積極参加し、皆から良い人と言われるようになりたいと思っていました。しかし実際はうまくいきませんでした。良い人と思われたいばかりに、気の合わない友人に対しても無理に話を合わせるようになり、その積み重ねによって段々と疲れていきました。

太宰治の「人間失格」という作品を読んだとき、周りの受けをよくするために本来の自分を押し隠し、人前で演技をし続け、表と裏の顔を使い分ける主人公は自分のようだと思いました。八方美人を続けるばかりに、本音（ほんね）をだれにも打明けることができなくなりました。そのうちに素行（そこう）の悪い友人たちとも付き合うようになり、果てはお店に入っては万引きをするようになりました。商品が欲しいからというよりも、勇気があるということを見せるため、また仲間として認めてもらうためでした。しかしある時、店の人に見つかり、警察に補導されました。大きなショックで、人生で初めて味わう挫折（ざせつ）でした。

私は極端に自意識過剰となり、休み時間にクラスの片隅で笑いが起こると、自分が補導されたことを笑っていると感じるようになっていました。一年前までは成績優秀で将来を有望視された生徒が、今は非行に走っている。この大きな変化に、自分でも人間の弱さや恐ろしさを垣間見たような気がしました。それまでは、人生とは幅の広い大きな道を悠々（ゆうゆう）と歩く、というイメージを持っていたのですが、実は一歩間違えば下に落ちる崖っぷちを歩いているのではないかと感じました。

このままではいけない、足を洗わなければと思っていた矢先、父の転勤の話が浮上し、藁（わら）にもすがる思いで、日本の高校を辞め再度ジャカルタに行くことになりました。転校先はインターナショナルスクールでした。しかし、目標を掲げて勉強、クラブ活動、音楽と、さまざまな分野に全力投球し、達成し、先生に誉（ほ）められるということを繰り返しているうちに、またしても疲れていきました。最後は、出ないエネルギーを振り絞るという状態で卒業を迎え、大学に入るために帰国しました。

大学生活を始めた時、これまでの自分の二つの指針（皆から良い人だと思われたい、人から認められたい）はもう止めにしようと思いました。では、他にどういった生き方ができるのだろうかと考えました。

残りの人生を揺らがず楽に生きる価値観を身につけることはできないか、もしあるのであれば大学在学中に知りたい、と思うようになりました。

まずは哲学書をと思い、簡単な本から読み始めたのですが、すぐに窮屈さを感じました。そのころ、サークルの先輩だった江藤朋加姉妹と知合い、聖書について話したり、ホームパーティのような家庭集会に誘われて参加するようになりました。

私は小学校六年生くらいの時から聖書に接する機会があったので、地球や人間を創造した神の存在を信じてはいましたが、「汝（なんじ）の敵を愛しなさい」とか「右頬（ほお）をぶたれたら左頬も出しなさい」という聖書の言葉は、一生かかってもどんな苦行を積んでも自分にはできないので、クリスチャンにはなれないと思っていました。そのことを集会の人に話すと、それは人間にはできない、と驚くような返答を受けました。しなさいと聖書に書かれていることに対し、できませんと簡単に返答してもいいのか迷いました。けれど、できないからこそ、それらすべてを全能なる神様に委（ゆだ）ね、頼った時に神様が成し遂げてくださるという話を聞き、とても楽になりました。人間は弱く無力であるという話の中に真理があるように思いました。聖書に書いてあることは自分の力ではできないけれど、すべておできになる主に一つひとつ頼って歩んで行けば良いのだと思うようになりました。また、私は神様をまったく顧（かえり）みなかったのですが、神様は常に私の最善を考え、見守ってくれていたと、ある体験を通して思わせられ、神様に対して何だか申しわけなく感じ、また同時に感謝が込み上げてきて涙があふれて止まらなくなりました。一九九二年のことでした。この経験を通し、神様は自分をも愛してくださり、赦してくださり、天国へ迎え入れてくださるという確信が与えられました。この確信と満足感は変わることなく、現在に至るまで続いています。

その後、かつて電車の切符代をごまかした人が駅に謝（あやま）りに行ったという話を聞き、自分も高校の時に万引きをしたことを謝るべきだと示され、お金をもって謝りに行くことができました。お店の人は驚いていましたが、「買ったこと」として処理してくださいました。自分の昔の罪が赦され、心がとても軽くなりました。

だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。（ルカ　19・8）

人を愛せない

信仰生活を通して学んだことの一つに、自分は人を愛することがまったくできない、ということがあります。あることがきっかけで、集会のある兄弟を愛することができなくなりました。聖書は何回も「隣人を愛せ」と説いています。隣人である兄弟を愛することができない原因は自分の罪にありました。罪が自分の中で大きくなり集会に来ても苦しく、祈っていても平安がありませんでした。ある時の交わりの中で次のみことばが与えられました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1～2）

私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。（1ヨハネ　3・16）

私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。…たとい

自分の心が責めてもです。（1ヨハネ　3・18、20）

最後の「たとい自分の心が責めてもです」の箇所がズシンと心にきました。自分にとって一見不利に見えるかもしれませんが、相手の兄弟の幸せを願い、一歩踏み出す決心をしました。大げさかもしれませんが、自分はどうなっても構わないという思いを持つことができました。何か具体的に行動を起こしたわけではありませんが、主がその兄弟を愛していることがわかり、主の愛におすがりすることができ、それまでの苦しみから解放されました。真実をもって愛そうではないかという主の呼びかけに対し、主の前にひれ伏し、自分はどうなってもいいという決断をする時に、後（あと）は主が成し遂げてくださるという体験をしました。このような罪深い自分のために主は十字架にかかってくださったことを知りました。

結婚のこと

話は前後しますが、私の救われた直後、同じサークル内で救われた兄弟がもう一人いて、朋加姉妹と合わせて三人で祈り会を始め家族や友人のために祈りました。ほぼ毎日顔をあわせるうちに好意を持つようになり、自然な形でお付合いが始まりました。しかし、あることから交際をとどめられる状況となりましたが、その後も、みこころにかなうのであれば、引合わせて欲しいと祈っていました。二人とも大学を卒業、社会人となり、別れてから数年たったころ、勇気を出して朋加姉妹の誕生日にお花と一緒に手紙を送りました。内容は将来の相手として具体的に祈り合えないだろうか、ということでした。これをきっかけに再びお付合いが始まり、翌一九九八年十一月に御代田で結婚式をさせていただきました。家族からは、結婚相手が信者であること、また聖書に基づく挙式であることに何の反対もなく、主の備えに感謝しました。

二回の海外生活と長女の出産

結婚して二年後にアメリカ・ボストンに一年間、そして帰国して半年後に今度はロシア・モスクワに三年半の駐在を経験しました。どちらの土地でも共に主を賛美する仲間が与えられ感謝でした。

モスクワで家内の妊娠が判明した当初はロシアでの出産事情に不安があったため、日本での出産を考えていました。しかし、航空会社から妊婦の搭乗を断られて、急遽（きゅうきょ）モスクワで出産することとなりました。そして、思いがけず、欧米の基準を持つ産科病院が新設されていたこと、モスクワで出産経験を持つ日本人夫妻と知り合って、必要な情報をたくさんいただけたことなど、主はすべての面で最善を整えてくださいました。日本からは義姉が手伝いに来てくれて、二〇〇六年七月、予定日ちょうどに無事、娘が生まれました。今から思えば、もし当初の計画どおりに日本で出産していたら、私は出産に立ち会うことも育児にかかわることもできなかったので、モスクワで出産できたことは感謝でした。出産から三ヵ月後、親子三人で日本へ帰国しました。

母の召天

二〇〇九年に双子の女の子が誕生しました。当時、私の両親はマレーシアでロングステイを満喫していたのですが、母が二ヶ月の予定で一時帰国し、泊りこみで手伝いに来てくれました。初めのうちは楽しく過ごしていたのですが、途中からだんだんと母の体調が悪くなっていきました。食欲がない、お腹に痛みを感じる、長く歩けないといった症状でした。双子の育児の手伝いで母に負担をかけさせてしまって申し訳ない、と思い、予定を少し早めてマレーシアに戻ってもらいました。

マレーシアで検査をしたところ、すい臓に影が見つかり、本格的な検査を勧（すす）められました。両親は緊急帰国し、末期のすい臓がんであり、手術や放

射線治療ができないことが判明しました。家族皆に衝撃が走りました。母が闘病生活を送る中、主治医からは、これ以上の抗がん剤治療は期待できない、余命は一ヶ月、自宅もしくはホスピスで残りの期間を過ごしてほしいと言われました。私は母に、一緒に祈ろうと促しましたが、母は「クリスチャンは肌にあわない」と言って断りました。その後、二〇一二年二月に母から電話がかかってきて、「自分の葬儀の時は秀樹（私）のお仲間（＝集会の兄姉）に入れて欲しい、葬儀はベックさんのお世話になりたい」と言われました。それまで母は、私の信仰は認めてくれていましたが、自分には関係ないというスタンスでした。ですから母が「葬儀は集会で行って欲しい」と言ったことにはとても驚きました。みんなのお祈りに神様が応えてくださったと本当に感謝でした。残された時間は短かったのですが母と共に祈ることができました。母は同年四月に天に召されました。葬儀にはベック兄を初め多くの兄姉に参列していただき、感謝でした。

父のこと

母を失った後、父は趣味のゴルフ、コーラス、同窓会幹事などを続けつつも、寂しさが募っていき「伴侶（はんりょ）を亡くした会」などに顔を出すようになり、そこで知合った女性と再婚を考えるようになりました。父には現実が見えていないようだったので心配になり、引止めようとしましたが無理でした。未入籍の状態で、この女性と同居を開始しましたが、直後に「このままではうつ病になる」と言って、着の身着のままで我が家へ転がりこんできました。そこには総務大臣賞を受賞し、海外生活での困難を克服してきた自信ある父の面影はありませんでした。

父は心に不安を抱え、夜眠れない日を送る中、自然な形で集会へ集い始め、ベック兄、ノイローゼを経験した兄姉、伴侶をなくされた兄姉との交わりが与えられました。悩みを通し、父が祈る者へ変えられたこと、主を礼拝する者とされて感謝でした。しかしその後も父の心身にはいろいろな症状が出始め、サービス付き高齢者住宅に入居することになりました。私たち家族がお見舞いする時は一緒に祈っています。父の心の不安は依然として解消されていませんが、主に委ねつつ、父や親族にとって最善の導きとなるように祈り続けています。

職場の上司

数年前より私は関連会社に出向することになりました。出向先では上司から頻繁（ひんぱん）に会議室に呼ばれ注意を受けるようになりました。以前の職場で評価されていた内容がこの上司からは評価されず、私の不備や脇の甘さを執拗（しつよう）に責められるようになりました。そのたびに自分の無能さを痛感しましたが、どうすることもできませんでした。八方塞（ふさ）がりになり、毎朝出社することが苦しくなりました。夜は熟睡できず、体重も減り、頭痛薬が手放せなくなりました。妻からは「荒野の泉」のメモをもらい、一緒に祈ってもらいました。そのメモからの抜粋です。

「あなたが、新しい一日を主への恐れを持って始めるなら、人を恐れる気持ちがなくなるでしょう。自分の能力を主の贈り物として受け取るなら、あなたの劣等感は次第になくなっていくでしょう。あなたは、困難と難しい環境の中にいますか。それは、私から来たのだ。あなたの弱さは、わたしの強さを必要としている。」

みことばにすがり付き、メモの内容を読み返し、祈り会でも祈っていただき、自分自身も祈りながら出社を続ける日々でした。一年後、不思議な形でこの上司は異動になりました。苦しかった二年間のことは、私が周囲を見ず、自分も見ず、主だけを見るための

訓練だったと思います。この経験を通して、仕事や職場のことで悩んでいる兄弟方と交わる機会が与えられ共に祈るようになりました。

最後に

子供のころ、私は母のしつけが必要以上に厳しいと感じ、親に対して心開くことができませんでした。子供が与えられ自分がしつける立場となった今、亡き母の厳しいしつけは聖書の内容と同じだったと感じるようになりました。

子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。
（箴言　13・24）

これまでの人生を振返ると、主は常に真実であり最善をなしてくださいました。特に両親の救いをみると二十年以上祈ってきたことに主がこたえてくださいました。自分の無力さや自己中心さを知ると同時に、主の不思議な守りや導きには感謝が尽きません。一人でも多くの方にこの主の素晴らしさを知っていただきたいと願っています。

まことに、あなたは大いなる方、奇しいわざを行なわれる方です。あなただけが神です。
（詩篇　86・10）

棚村秀樹（たなむらひでき）
一九七一年十一月生まれ
ジャカルタ日本人学校小学部・中学部、国際基督教大学高等学校、ジャカルタインターナショナルスクール、上智大学法学部法律学科、ボストン大学経営学大学院（ＭＢＡ）卒
石油天然ガス・金属鉱物資源機構　勤務
愛妻・朋加（ともか）、長女・恵実加（えみか）、次女・愛加（あいか）、三女・結加（ゆいか）

イエス様の導きと憐れみに感謝します

棚村　朋加



左から長女の恵実加さん、次女の愛加さん、夫の秀樹さん、三女の結加さん、朋加さん

私の救い

私の生まれる少し前に、両親は救われて吉祥寺集会に集っていました。幼いころからイエス様の話を聞き日曜学校にも通っていた私にとって、イエス様を信じることは空気の存在を信じるのと同じくらい自然なことでした。周りの友人が「神様なんているか分からない」と思っていることの方が不思議でした。ただ当時は、十字架の意味と自分自身との関係については、ほとんど意識していなかったと思います。

そんな私が十字架について真剣に考えるようになったのは、小学生の時のいじめがきっかけでした。最初、私はいじめる側にいました。そこには、皆と一緒につながる安心感や優越感がありました。ところがある時から私をターゲットとしたいじめが始まり、耐え難い苦しみを味わいました。その時初めて、私がこの苦しみを他の人に与えていたこと、楽しみながら他の人を傷つけていたことに気づかされました。自分の中に

陰険な罪の性質があることを思い知りました。この時、自分でさえ目を背(そむ)けたくなるような私の罪のために、イエス様は十字架で血を流してくださったことを知りました。私はイエス様に、「ごめんなさい、ありがとうございました」としか言えませんでしたが、すべてが赦されているという喜びが与えられました。このことがイエス様を個人的に知るきっかけであったと思います。

結婚への導き

大学受験を迎え、希望大学に合格した時は実力ではなく主の導きだと感じました。そこには何かの意味があると思い、入学前から母と一緒に「大学でみこころのように導いてください」と祈っていました。

主人と出会ったのは大学三年生の時でした。聖書や信仰について話をすると真剣に聞いてくれて、求める心のある人だという印象を持ちました。礼拝や家庭集会に誘うと素直に来てくれて、イエス様の憐(あわ)れみで、半年後ぐらいに救われました。その後、お互いに好意を持つようになり交際することになりましたが、その交際はすぐに閉ざされました。当時は「この交際がみこころでないなら閉ざしてください」と祈っていましたので、祈りに対する応(こた)えだと受け止めました。

それから数年後に結婚へと導かれたのですが、この結婚も主の導きなしにはあり得ないことでした。私は以前から、結婚をするときは、これがみこころだという確信を持ってしたいと思っていました。キリスト者にとって結婚とは飛び込むことはできても飛び出すことはできないものなので、自分で決めるのではなく、未来のこともすべてご存知の神様に決めていただきたいと思っていました。そして二つのことを祈っていました。一つは、「結婚に関して自分からは動きたくはありません、イエス様よろしくお願いします」。

もう一つは、「私は鈍(にぶ)くて主のみこころがどこにあるか分かりません、私に分かるようにみこころを示してください」というものでした。そんな祈りに主は応え、不思議な方法で導いてくださいました。鈍い私にも分かるように、みことばを通し、周りの兄弟姉妹を通し、環境を通し、お互いの気持ちを通して、目に見え、耳に聞こえる形でみこころを示してくださいました。与えられた確信に感謝しつつ、一九九八年十一月御代田で結婚式を挙げさせていただきました。

双子誕生

長女が二歳の時、再びお腹に与えられた赤ちゃんが双子であることが分かりました。晴天の霹靂(へきれき)とも言える事柄でした。双子の妊娠出産はリスクも高く母体への負担も大きく、産後の育児も大変だと聞いており、自分たちに負いきれるかどうか不安でした。けれど、多くの方のお祈りと主の憐れみによって妊娠中の私の身体は不思議なくらい守られ、双子妊娠にしては珍しく最後まで入院することもなく無事に出産を迎えることができました。妊娠中、ミンヘン姉が母に「(双子の妊娠には)何かの目的があります」と仰ったそうです。私にはその言葉が胸に響き、目的とは一体何だろうと考えを巡らせていました。母にはこの時「もしかしたらこのことで棚村のお母様が救われるのかもしれない」との思いが与えられたそうです。

二〇〇九年夏、双子が誕生してからは壮絶な育児戦争が始まりました。三歳になった長女の世話をしつつ、二人の赤ちゃんにミルクや母乳をあげておむつを替えてお風呂に入れると、それだけで一日が終わりました。夜中も赤ちゃんの一方または両方が泣き出すため、毎日が寝不足でした。朝起きても眠くて朦朧(もうろう)とした状態で、今日も一日が始まるの

かと思うとそれだけでグッタリでした。このころのことは大変すぎて正直あまり記憶に残っていません。主人も一ヶ月近く育児休暇を取って育児や家事に全面的に協力してくれました。二人がかりでやっとその日が過ごせる状態でした。私の両親、親族、多くの姉妹方がお手伝いにいらしてくださいました。

義母のこと

当時、棚村の両親はマレーシアでロングステイをしていましたが、双子の世話のために義母が一時帰国して、二ヶ月間の予定で泊まり込みで手伝ってくれることになりました。当初は義母にも気持ちよく過ごしてもらいたい、私も上手に甘えたいと思っていました。けれど現実は厳しいものでした。

結婚してからの十年間、義母とは何も問題もなく良好にやってきていました。でもそれは環境が守られていただけに過ぎなかったことに気づかされました。たった一～二ヶ月の同居生活で、自分がいかに愛のない者か、姑（しゅうとめ）に従うことのできない我儘（わがまま）な者かを思い知らされました。狭いマンションの中、いつもどこかで赤ちゃんが泣いている状況で、義母と私は互いに我儘をぶつけ合うようになり、その場の空気が重くなっていきました。私には義母を裁く思いがあり、自分を正当化する思いがあり、つねに追い詰められていて、叫び出したくなるほどでした。

そんな中、義母が体調を崩していきました。最初は近所の病院で「逆流性食道炎」と診断されました。ところが薬を飲んでも一向に良くならず、逆に症状は悪化して日常生活にも困るようになっていきました。私たちは赤ちゃんの世話で義母を疲れさせてしまったのだと思い、予定を早目に切り上げて義父の待つマレーシアに戻って休んでもらうことにしました。

義母がマレーシアに発（た）った後、主人、私、私の

両親それぞれに思わされたことがあり、一緒に集まって義母のために祈ることになりました。何としてでもイエス様に出会ってもらいたいという切実な祈りでした。それまでも義父母のことを祈ってきていましたが、この時の祈りはもっと切実で緊張感のあるものでした。

祈ってから二日後、義母から電話があり「膵（すい）臓に影があるようなので、これからすぐに帰国して本格的に検査する」とのことでした。主からの応えだ、と震（ふる）える思いで電話を受けました。主が義母に働かれようとしておられると感じました。その後、義母は膵臓の癌で、ステージ4の末期状態、手術は不可能、余命は半年くらいと言い渡されました。家族の間に衝撃が走りました。少し前まで元気に日々を謳歌（おうか）していた義母が、余命半年。この半年の間に義母がイエス様に心を開き天国への道を歩むことができるように、と祈り始めました。

義父母はマレーシアを引き払い、日本で闘病生活を始めました。病状は一進一退で義母はどんどん痩（や）せていきました。そんな中でも義母は福音に対して拒否反応を示し、主人がお見舞いで持っていくみことばには心を向けませんでした。私たちは焦（あせ）りつつも祈るしかありませんでした。

そんな中、義母から一本の電話がありました。「自分の葬儀はベックさんにお世話になりたい」というものでした。集会に批判的だったそれまでの義母の言動を考えると奇跡のように思え、主が直接義母に働いてくださり、義母も主に心を開いてくれたのだと感謝しました。それからしばらくして家族でお見舞いに行った時、目を瞑（つむ）っていた義母に私が声をかけたところ、痩せて皺（しわ）だらけになった義母の顔にパァと笑顔が広がりました。嬉しそうな可愛い笑顔で、義母はまるで少女に戻ったかのように見えました。その笑顔を見て、私なんかが来ても笑顔で

迎えてくれるのだ、何て可愛いのだろう、ありがたい、と母に対する親愛の情が私の胸の中に湧（わ）き上がってきました。自分自身では義母に対する複雑な思いを変えることはできなかったのに、イエス様は一瞬でその思いを変えてくださったのでした。

その後、義母とは平和で穏やかな関係に戻ることができました。最期の数ヶ月は、お見舞いに行く度（たび）に主人が義母の枕元で祈り、義母も「ありがとう」と言ってくれるようになりました。

二〇二一年四月、義母は天に召されました。葬儀は、義母の生前の希望どおり聖書に基づくもので、祝福のうちに義母を送り出すことができました。参列した親族の中には、葬儀に感動して「自分の葬儀も同じようにやってもらいたい」と言ってくれる者、主の愛と兄弟姉妹の愛に圧倒されて涙する者がいました。義母は一粒の麦でした。生前に証（あかし）をすることはありませんでしたが、その死を通して、葬儀や納骨式を通して、周りの方々に福音を広めてくれたのでした。

一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

（ヨハネ　12・24）

義父のこと

義母が天に召されて以来、未信者であった義父はつねに独り身の寂しさを感じていたようで、再婚への希望を持つようになり、ある方と同居生活を始めることとなりました。私たちには、あまりに性急な決定に思えたため、「慎重に考えて欲しい」と伝えましたが、義父の耳には届きませんでした。後に義父が辛い状況に陥るかもしれないけれどそれを通して主に助けを求めるようになるようにと祈りました。

一ヶ月半後、義父は予想とは異なる同居生活に耐えられなくなり、相手の家から飛び出してきたため我が家で引き取ることになりました。挫折感と罪悪感に苛（さいな）まれた義父は別人のようになっており、心療内科で「極度の鬱（うつ）病」と診断されました。この時初めて義父とじっくりみことばを交えて話をすることができました。人間には袋小路に見えても神様には解決策があること、辛く苦しい状況にも何かの意味や目的があること、自分で頑張（がんば）らないで神様に頼って欲しいこと、などを伝えました。義母が召された時でさえみことばには無関心だった義父が、初めて心を開いて私たちの話を聞いてくれました。そして「すぐには判断できないのでゆっくり考える時間が欲しい、集会にも行ってみたい」と言ってくれました。そして義父は集会に集うようになり、聖書を読み、祈り、十字架に感謝する者となっていきました。主が義父のために用意してくださった絶妙な救いのご計画を見せていただき、主への感謝が溢（あふ）れてひれ伏す思いでした。

義父はその後長野の義姉家族の所に移ってしばらく過ごした後、東京の老人施設に入居することになりました。

そんな中、主は私自身に光を当てられました。私は義父のことは主にお任せするしかない、と思っていましたが、一方で「これだけは守りたい」という思いを握っていました。それは、義父を再び我が家に引き取ることはしたくないという思いでした。我が家での滞在中、義父はすべてをネガティブにとらえ、つねにネガティブな言動でしたので、そんな義父と長時間一緒にいるとこちらまで鬱病になりそうに思えました。まだ手のかかる子供三人を育てつつ、鬱病の義父のお世話をすることは、忍耐力のない私にとっては大きな重荷でした。「義父と一緒だと私まで倒れてしまう、再度の同居だけは何としても避けたい」というのが私

の本心でした。ところが主は、ある交わりを通してその思いが主への不信仰であることを示され、その思いを手放すことを要求されました。主が最善をなしてくださると知っていながら、私は希望ではなく不安ばかり感じていました。主に委ねると言っておきながら、自分で勝手に条件や道筋をつけようとしていました。私の中には主への信頼も信仰もまったくなかったことが明るみに出されました。

涙とともに悔い改めた後、肩から重荷がストンと落ちたように思いました。仮（かり）に主のご計画が自分の希望とは違っていたとしても、それが最善なのだし、その時には必要な力が主から与えられるということが、やっと自分のこととしてとらえられるようになり、目から鱗（うろこ）が落ちたようで楽になりました。

この証を書いている現在でも（二〇一五年年末）義父の状態は変わっておらず、むしろ現実はますます悪くなっているように見えます。けれどもみことばで約束してくださっているように、最終的には主が栄光を見せてくださることを信じて期待して祈り続けていきたいと思っています。

この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。（ヨハネ　11・4）

もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る。（ヨハネ　11・40）

棚村朋加
一九七〇年十一月生まれ
武蔵野市立本宿小学校、第三中学校、恵泉女学園高等学校、上智大学文学部史学科卒
夫・秀樹（ひでき）、長女・恵実加（えみか）、次女・愛加（あいか）、三女・結加（ゆいか）

それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です

湯口　伸彦



右から伸彦さん、妻のうつぎさん、うつぎさんの叔母夫婦（水渡兄姉）

イエス様とはいったいどのようなお方なのでしょう。恵みが大き過ぎて、とても一言で表すことはできないようにも思います。

私はイエス様によって滅びの穴から救われ、信じられないほどの恵みを受けてきました。今回の証しを考えていたときに、イエス様とはいったいどのようなお方なのかという問いに対する答えを、すでに父から知らされていたことに気づきました。

私の父 重夫（しげお）は二〇一二年九月に、脳梗塞（こうそく）が原因で十七年間続いた寝たきりの闘病生活の末に天に召されました。母 美佐保（みさほ）はそのような父をたった一人で介護し続けました。両親は長崎に住んでおり、私は山梨、妹 美由紀（みゆき）は東京にそれぞれ家庭を持っていたからです。私は幾度も同居を考えましたが、両親は長崎を離れたがりませんでした。父は戦争が原因で若くして両親と兄を失ったために、ドイツとイタリア以外の外国人